

棺に跨がる

西村賢太

あの芥川賞騒動からはや二年。当時は「たいへんだ！ 西村賢太がテレビのトークショーに出てる」との友人のメールで、慌ててYouTubeでその勇姿を確認するなどということもあったが、今や氏のテレビ出演など驚くべきことではなくなった。国民的アイドルというやや言い過ぎかもしれないが、西村氏はすでに文芸誌に限らず週刊誌やヴァラエティ番組でもおなじみの顔となった。

しかし、中には「大丈夫、賢太？」との一抹の危惧を抱いた人もいないかもしれない。だって、そんなに運命が変わっちゃって、今までのあの赤貧洗うがごとき、だからこそ果てしなく私小説的だった生活はどうなる？ 自らの出自や性格本性を呪いながらも風俗と酒

にまみれ、同居する女性にはひたすら極悪非道な振る舞い、あふれんばかりのひがみ根性ゆえに安定的な人間関係などは望むべくもなく、ときに激しい嘲罵を周囲にまき散らしつつ、ついには頼みの出版社さえ出入り禁止になってしまう自滅的作家……。賢太にはセシブな品位や華やかさは似合わない。芥川賞を機にその賢太節が失われてしまうのではないか？

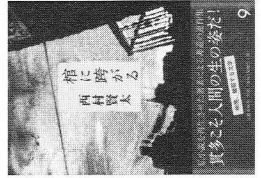
私もそんな心配に胸を痛める読者のひとりだった。しかし、『棺に跨がる』を読むと、そうした懸念はすばつと吹き飛ぶ。

西村氏の愛読者はたいていさうだと思いが、ふつうの小説ともがって彼の作品には「いつもの味」を求める。かなりときつ「いつも

る独特なこだわり方がなくてはならない。今回の『棺に跨がる』で際立つのはそのなのである。

語りは発端から結末にむけた前進運動である。語ることで私たちは前に進む。逆にいうと、前に進むことでこそ、語りは展開しオチを生み出す。たとえ事実関係として時間が前に進んでいなくても、まるで新しいことが起きたかのように錯覚させるのが小説の語りというもの。西村氏はこの遭遇と発見の錯覚を、ひたすら過去へ過去へとくだわることで実現するわけだが（これだけでもすごいこと）、それを同じ「カツカレー事件」を素材に似たような話を手を替えて品を替えて語り直して行い（ほとんど読者に対する挑戦だ、しかも、驚くべきなのは、四つの短篇の間に何か進みゆきがあるかと勘違いさせるところである。いや、勘違いなどではない。ほんとうにそうなのだ。それは単に四篇の順番が時系列をなぞっているという程度のことではない。作品ごとの大いじわりと新しい遭遇がある。だから、四つの順番を変えて読んでも同じ印象を持つ。賢太もそれぞれが本質的に新しいのである。賢太が可能なのは、おそらく西村氏

根の筆法 阿部公彦



文藝春秋 1365円

の味」を。しかも、その期待はほぼまちがいにかなえられない。今回の作品集だつてそこはそだ。藤澤清造の故郷でのお参りの場面から始まる表題作「棺に跨がる」も、やや古風な冒頭部の描写からすばやく話は展開し、「浴衣に着替える際、貫多はいつになく自分の携帯電話をチラリと見てみる」などと、いかにもすぐつたい思わせふりな仕掛けをへて、いよいよ「その前々日の夜、秋恵に對してしてかした、自らの暴力行為の事態收拾……」などとある。私たちは「そうかい、今回は秋恵もの、だね！」とすると、稲垣潤一も出てくるのかな？ メインは写真事件？ マヨネーズ事件？ それとも例のカツカレー事件かな？」と胸を高鳴らせる。

っているからだ。「新しさ」は未来からくるとは限らない。過去からくる新しい自分と出会うことができる。西村氏もそうなのだ。秋恵をめぐる「カツカレー事件」とその顛末をくり返し語ることで、そのたびに新しい自分を見出す。本書が西村賢太初体験という読者は、どの作品でも「貫多は根がくだから」ということばが呪文のようにくり返されることに、多少奇異の念を抱くかもしれない。何でそんなに「根」にくだわるのか、と。それは彼の「根」が無意識の栄養を秘めているからなのである。根っこにさかのぼったからといって何かがわかったり決着したりはしない。「根がくだから」などと照れまじりに根を掘れば掘るほど、西村賢太という人はわけのわからない、不安定で混沌とした暗黒のエネルギを産出するのである。新しい話など必要ない。「カツカレー事件」さえあれば、いくらでも飯は食えるし、物語は生まれる。私たちはついジェットコースター的な展開に氣をとられ、奥へ後ろへ下へと後ずさつていく西村氏のほんとうの震源を見逃しがちだが、この作品集はオチの作り方からしておかう。しつかり、しつこく、後ずさつていく。芥川賞がどうのという語ではない。いよいよおもしろくなってきた。